

田中萬年・大木栄一編著

# 『働く人の「学習」論』を読んで

—第11回エルゴナジー研究会 指定討論会より—



職業能力開発総合大学校 砂田 栄光

### はじめに

2006年2月18日(土)、第11回エルゴナジー研究会が開催された。今回は、エルゴナジー(職業に導く意のギリシャ語の造語)の原点ともいえる「働く人の学習論」をテーマに指定討論の形で進められたので紹介したい。

#### 1. 働く人の学習の在り方と方向性

最初の指定討論者として産能短期大学の小野紘昭氏が発表された。特に、「働く人のための学習については従来あまり重視されてこなかった」こと、「学ぶことの最も重要なことは仕事の中にある」ことをとりあげられ、生涯能力発達と発達課題から、「職業」(JOB)からボランティアや社会活動を含む幅広いとらえ方としての「仕事」(WORK)への移行と見かけ優先の外的キャリアの視点から、働きがい・生きがいといった意味づけに価値をおいて内的キャリアの視点が必要ではないかと述べられた。

若年者の職業能力開発については、「若者たちは学校教育で職業能力を身に付ける重要性とその具体的な方法を知らないまま、社会へ放り出されている」こと、「私立の専修学校の援助策が強化されており、その結果公共職業訓練は専修学校との競合で削減の方向にある」ことをとりあげられ、「13歳のハローワーク」等が大学生に売れている実態等を紹介された。特に、専修学校を活用した若者の自立・挑戦支援事業から、フリーターが職を獲得するうえで必要な知識・技術に関する教育の提供(フリーター・若年失業者・無業者約200万人)について下記の紹介があった。

- ① フリーター等に対する短期教育プログラムの開発、導入(56校程度)
- ② 実務・教育連結型人材育成システム(日本版デュアルシステム)の導入(20校程度)
- ③ キャリアマインドサポート(CMS)教育の導入(3日間程度の教員研修)

最後に、キャリアの自己責任とホワイトカラーの職業能力開発についてもとりあげられ、エンプロイヤビリティ(雇用されうる能力)について、日常業務(企業固有型の知識・スキル)から一般化・体系化(汎用型の知識・スキル)へ、そして専門化(市場型の知識・技能)を目指して、能力開発が「企業の責任」から「従業員個人の責任」へと変化しているなかで、キャリア・コンサルティングの重要性が増している点を指摘された。

質疑応答の中で、今回紹介された「働く人の学習論」が短大校用のテキストとして編纂された「仕事を学ぶー自己を確立するためにー」の続編にあたる総合大用のテキストであり、今後、「スーパーのライフ・キャリアの虹」としての内的キャリアの視点については課題となった。

#### 2. 「学校的価値」と「職業的価値」の問題と運動論問題について

2番手の指定討論者として東京大学教育学研究科博士課程の植上一希氏が発表された。論点の設定として、今後の職能形成学の形成にとって重要な点として、「学校的価値」と「職業的価値」の問題と、労働者の武器となる「職業能力形成」という運動論的問題について述べられた。

まず、「学校的価値」と「職業的価値」の問題では、フリーターの増加などによって顕在化してきた「学校的価値」の問題性に対して、「職業的価値」の回路を設定し、あらたな「キョウイク」概念を設定し、新たな「フツー」のための社会的有用性を模索していくことが求められているとし、この軸が非常に重要な議論を提起している指摘された。

次に職業能力形成を労働者の武器としてみる点（運動論問題）については、「キョウイク」の設計に当たって、理論分野における見直しが求められており、他方で、運動的観点から「職業訓練」を労働者の武器となる「職業能力形成」とみるべきだという問題提起から議論が進められた。「武器」とは何か？については、①「労働者」というカテゴリーに必然的に付随する、生産関係（労使関係）での「武器」と、②個人が自らの職業生活において自己実現するための「武器」に分類して説明された。

最後に、社会教育（段階）における職業能力形成を武器とみる視点について、技術論との関係で整理された。資本主義社会において、職業訓練を基本的に労働者支配の道具としてとらえる視点もあるが、これは一面であり、労働者教育の重要性と生涯教育政策のもつ「自己啓発」的職業能力開発の批判と区別すべきであるとした。また、資本主義社会のなかでの相対的に存在するはずの労働者自身にとっての職業訓練の意義を積極的にとらえる必要性についても指摘された。今後の検討課題としては、生産関係と技術ならびに技能との関係、特に技能の問題についてとりあげられた。

### 3. 働く人の「学習」論を読んで（賛成の立場から）

3番手の最終指定討論者として、私が職業能力開発総合大学の教務という場で働く者として意見を述べた。2005年10月に21世紀大学経営協会大学評価委員会が日経リサーチに調査を依頼して実施した卒業生からみた大学「教育力」調査から、国立大理系で学習意欲が湧く授業の評価が低いことが指摘された。また調査結果からみた大学教育の課題としては、もっと学んでおけばよかった能力や知識として①語学など国際化への対応能力、②IT時代に対応した情報スキル、③「資格の取得」による専門知識と活用

能力があげられ、「実践力」の付加価値形成力の強化が重要であり、学生が「教員との交流」を求めている点が強調された。

また、「第8次職業能力開発基本計画」の策定予定から、その検討課題として①職業意識の啓発の実施、②教育訓練コースに関する情報提供、③公共開施設のオーダーメイド訓練推進、④技能五輪国際大会を契機とした技能振興策の実施等、このチャンスを生かすことが大切であり、職業訓練・教育訓練機会の多様化への方策が必要であると指摘された。

最後に、産業教育関連分野の学会動向とあわせて、産業教育学会活動のキーワードとエルゴナジー（職能形成学）のキーワードにより再編成が必要であり、また、大学、専各、公共訓練、企業内訓練は「エルゴナジー」化傾向にあり、このチャンスを最大限生かすべきであると提案がなされた。

### おわりに

エルゴナジー研究会では、エルゴナジー（人を職業に導く教育訓練活動の総体を示す概念）に関する研究、調査、実践活動について意見交換と情報共有を目的として年に4回程度、今回のような発表会を実施しています。興味を持たれた方はぜひご参加ください。詳細についてはWebサイトをご覧ください。<http://www.uitec.ac.jp/edus/erg/index.html>

#### <参考文献>

- 1) 田中萬年ほか：『働く人の「学習」論—生涯職業能力開発論』、学文社、2005。189ページ、1900円＋税
- 2) 佐々木英一：図書紹介『働く人の「学習論」—生涯職業能力開発論』、産業教育学研究第36巻第1号、2006。1。

